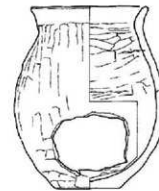


渡里町遺跡

(第5地点)

— 市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2008

水戸市教育委員会

渡里町遺跡

(第5地点)

— 市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

水戸市教育委員会

ごあいさつ

「渡里町遺跡」は、那須茶臼岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しております。

この「渡里町遺跡」の周辺には、古代常陸国那賀郡の郡衙周辺寺院である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や官衙遺構が見つかる「台渡里遺跡」、国指定史跡「愛宕山古墳」など多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に市道拡幅工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、改善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本調査により、縄文時代の土坑や古墳時代～奈良・平安時代の集落とみられる竪穴住居跡群が確認されるとともに、各種の遺物が出土し、本市の古代史研究はもとより、今後において埋蔵文化財を保護・保存するうえでも貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました周辺住民の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成20年6月

水戸市教育委員会
教育長 鯨岡 武

目 次

あいさつ 目次 例言 凡例	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	1
1-3 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
2-1 地理的環境	3
2-2 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	8
3-1 調査の方法	8
3-2 基本土層	8
3-3 遺構	11
3-4 遺物	25
第4章 総括	38
引用・参考文献	40
写真図版	
報告書抄録	

挿図・表目次

第1図 渡里町遺跡の位置	3	第13図 5区南側遺構図	22
第2図 渡里町遺跡と周辺の遺跡位置	4	第14図 出土遺物(1)	27
第3図 基本土層図	8	第15図 出土遺物(2)	28
第4図 調査区的位置	9	第16図 出土遺物(3)	29
第5図 調査区方眼図	10	第1表 渡里町遺跡と周辺遺跡一覧	5
第6図 1区遺構図(1)	12	第2表 ビット一覧	23
第7図 1区遺構図(2)	13	第3表 出土土器属性一覧	30
第8図 2区遺構図	16	第4表 出土平瓦属性一覧	32
第9図 3区遺構図	17	第5表 出土石器・金属製品属性一覧	32
第10図 4区遺構図	19	第6表 土器・石器・金属製品計量表	33
第11図 5区北側遺構図	20	第7表 瓦計量表	37
第12図 5区中央部遺構図	21		

図版目次

図版1 調査区全景・1区の遺構調査状況
図版2 1・2・3区の遺構調査状況
図版3 4・5区の遺構調査状況
図版4 出土遺物(1)
図版5 出土遺物(2)

例 言

1. 本書は、水戸市に所在する渡里町遺跡（第5地点）の発掘調査報告書である。
2. 調査は市道常警31号線道路改良工事に伴い、水戸市より委託契約を受けた東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、水戸市教育委員会の指導の下に行った。

調 査 地 水戸市渡里町字八幡前 2594 地先～渡里町字八幡前 2801 地先

調 査 面 積 128.9 m²

調 査 期 間 平成 20 年 3 月 24 日～平成 20 年 5 月 23 日

調 査 担 当 川口武彦（水戸市教育委員会事務局）

調 査 支 援 佐々木藤雄、林 邦雄（東京航業研究所文化財調査室）

調査参加者 石川 勉、今井千恵、大橋正子、黒須秀昭、嶋本慶子、鈴木潤一、高安幸良、中山忠雄、村山彰子

4. 本書の執筆・編集は、佐々木・林・川口・渥美・関口が行った。

5. 調査組織は下記のとおりである。

水戸市教育委員会教育長	鯨岡 武
水戸市教育委員会教育次長	小澤 邦夫（平成 20 年 3 月 31 日まで）

内田 秀泰（平成 20 年 4 月 1 日から）

水戸市教育委員会文化振興課長	仲田 立
水戸市教育委員会文化振興課長補佐	中里 誠志郎

事務局（平成 20 年 3 月 31 日まで）

宮崎 賢司	水戸市教育委員会文化振興課文化財係長
川口 武彦	水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事
関口 慶久	水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事
緑川 義規	水戸市教育委員会文化振興課文化財係主事
新垣 清貴	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
渥美 賢吾	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
木本 孝周	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

事務局（平成 20 年 4 月 1 日から）

宮崎 賢司	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係長
荻谷 慎一	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係主査
関口 慶久	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係文化財主事
渥美 賢吾	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係文化財主事
金子 千秋	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係埋蔵文化財専門員
五上 義隆	水戸市大串貝塚ふれあい公園所長
川口 武彦	水戸市大串貝塚ふれあい公園文化財主事
色川 順子	水戸市大串貝塚ふれあい公園埋蔵文化財専門員
天津 郁子	水戸市大串貝塚ふれあい公園埋蔵文化財専門員
飛田 邦夫	水戸市大串貝塚ふれあい公園嘱託員
山戸 祐子	水戸市大串貝塚ふれあい公園嘱託員

6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です（敬称略・順不同）。

青山俊明、飯島一生、今尾文昭、岡本東三、大塚初重、川崎純徳、瓦吹 堅、黒澤彰哉、後藤一成、後藤孝行、後藤道雄、齋藤弘道、坂井秀弥、清野孝之、関根唯充、日高 慎、山中敏史、横倉要次、茨城県教育庁文化課、文化庁文化財部記念物課

凡 例

1. 本文中に掲載した遺構実測図の縮尺は次の通りである。
全体図 1/400 各区全体図 1/60、1/80
遺物実測図の縮尺は各頁に記載した。
2. 遺構実測図中のレベルは海拔高、方位は座標軸を示す。
3. 遺物写真図版の縮尺は実測図と一致する。
4. 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

第1章 調査に至る経緯と経過

1-1 調査に至る経緯

文化財保護法第94条に基づき、平成18年7月31日付狹整第207号にて水戸市長加藤浩一（狹あい道路整備課長）から茨城県教育委員会教育長（以下、「県教育委員会教育長」という。）あて、道路改良工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知について」が水戸市教育委員会（以下、「市教委」という。）へ提出された。

開発予定地である水戸市道常磐31号線（渡里町字八幡前2594地先～渡里町字八幡前2801地先）は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「渡里町遺跡」の範囲に該当しており、2mの幅員を4mの幅員に増幅させる内容の市道改良工事であり、茨城県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準に照らし合わせた場合に、原則Ⅲの「恒久的な工作物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となる場合」に該当することから、工事着手前に市教委が発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる必要があるとの意見書を付して県教育委員会長あて進達した。

意見書を受けて、県教育委員会教育長から平成18年9月20日付文第1022号にて、工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので、工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨、勧告があった。

これを受けて、市教委は総延長180.0mのうち、沿線に面する住宅の玄関先と駐車場出入り口部分等を除いた総計184.8（長さ92.4m×幅2.0m）mを調査範囲とすることを決定し、平成20年3月24日から本発掘調査を実施することとなった。（川口）

1-2 発掘作業の経過

発掘調査は平成20年3月24日から同年5月23日までの約2ヶ月間にわたって実施した。

先ず3月24日に5区に分けられた調査区の道路アスファルト舗装の截断を行った後、調査区周辺工事との関係で4区において表土除去作業を開始した。翌24日より遺構確認作業に入り、検出された遺構の調査を実施した。27日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

4月1日より2区の表土除去と遺構確認作業に入り、検出された遺構の調査を適宜進めた後、4日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

8日より3区の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査を適宜進めた後、21日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。

22日より5区北側・中央部・南側の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査と5区中央部・南側の基本土層確認作業を適宜進めた後、5月1日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了し、埋め戻しを行った。また、同日より2区から5区までの各調査区についてアスファルトによる仮舗装を実施した。

5月7日より1区の表土除去と遺構確認作業に着手し、検出された遺構の調査と基本土層確認作業を適宜進めた後、22日には写真測量作業と全体写真の撮影を終了した。翌23日には埋め戻しとをア

スファルトによる仮舗装を実施し、発掘作業を完了した。

(林)

1-3 整理等作業の経過

整理作業は平成20年5月26日より平成20年6月9日までの約0.5ヶ月間にわたって実施した。

5月26日～6月9日には遺物の洗浄・注記・接合作業と並んで、写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。

6月10日～6月16日には遺構図面の修正・トレース、遺物の実測・トレース、遺物写真の撮影、図版作成、原稿執筆などの作業を行い、6月17日より6月23日にかけて報告書編集作業を実施した。

(林)

第2章 遺跡の位置と環境

2-1 地理的環境

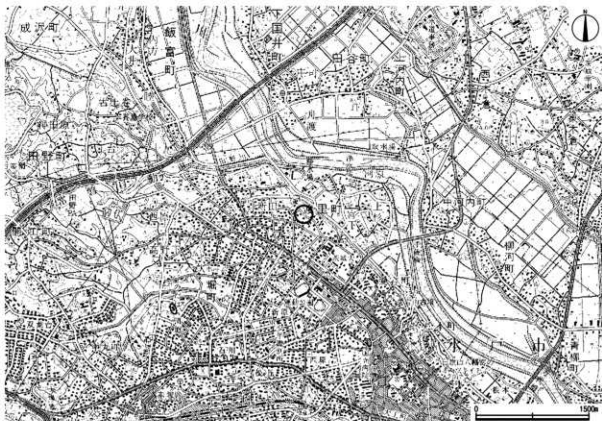
渡里町遺跡は、北緯36度24分13秒、東経140度26分31秒（世界測地系）の茨城県水戸市渡里町字八幡前2594地先～2801地先ほかに所在する。

渡里町遺跡が所在する水戸市渡里地区は、北を那珂川に、南を桜川に挟まれた通称「上市台地」と呼ばれる那珂川によって形成された河岸段丘上に位置しており、那珂川が南北方向から東の方向へ蛇行していく場所である。渡里という地名がいつ頃まで遡り得るのか定かではないが、渡河点との関わりが想定される地名である。上市台地の東側斜面から斜面下にかけては湧水点が点在しており、古くから住み良い土地であったと考えられる。低地との比高は約30mである。発掘地点は、那珂川が東へ蛇行する場所から南西方向に向かって入り込む谷津の南東側の台地上である（第1図）。

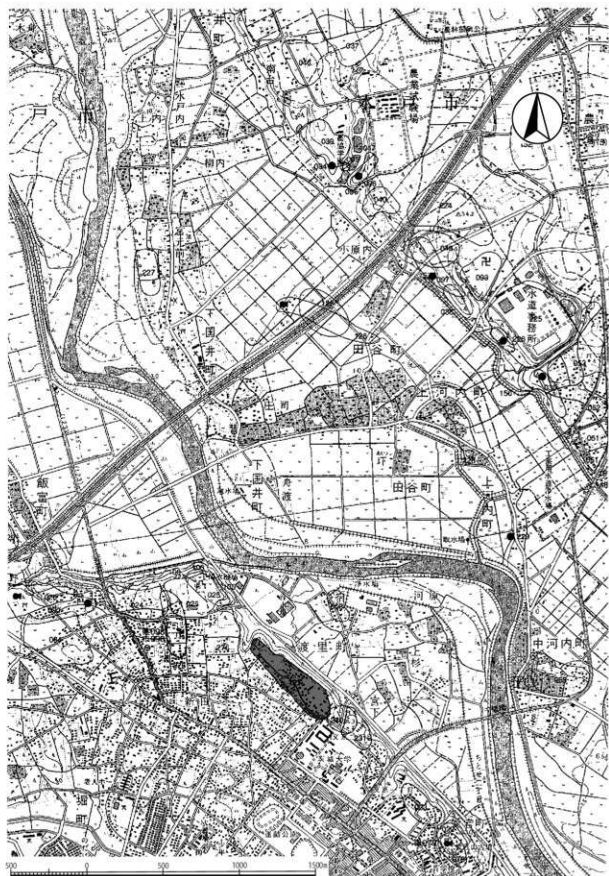
（川口）

2-2 歴史的環境

渡里町遺跡は、国指定史跡「台渡里廃寺跡」の南東で、近隣の長者山城城主春秋氏の菩提寺である勝幢寺の南に位置する遺跡であり、那珂川を見下ろす標高31～34mの台地縁に沿って広がっている。昭和40年代後半以前はこの一帯に畑地が広がっており、所々に雑木林が残っていたが、以降から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。渡里町遺跡が立地する那珂川流域の台地上には先土器時代から近代に至るまでの多数の集落跡と古墳・横穴、寺院跡・官衙跡、城館跡が確認されている（第2図、第1表）。以下では周辺の先土器時代～中・近世遺跡を概観する。



第1図 渡里町遺跡の位置（国土地理院発行1：50,000「水戸」に加筆）



第2図 渡里町遺跡と周辺の遺跡位置 (茨城県遺跡地図 1:25,000「水戸」に加筆)

第1表 渡里町遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、石斧、石鏃、土偶、弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器(古)	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、石斧、石鏃、土器、弥生土器(後)、土師器(古前)、須恵器	
24	アヲキ遺跡	集落跡	土師器(先)、縄文土器(早～晩)、石斧、石鏃、土師器(古・金・平)、須恵器(金・平)	S27年、H1年、H18年度調査
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古・金・平)	
26	宮元遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、土師器(金・平)、須恵器(金・平)	
35	河川遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、土師器(古)、土師器(金・平)	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古前、後)	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器(前)、弥生土器(後)、土師器(古前、後)	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)、石鏃、土偶、弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
46	茅草山遺跡	集落跡	埴器(先)、縄文土器(前～後)、土師器(石製土器、土器)、土師器(金・平)、須恵器(金・平)	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、弥生土器(後)、土師器(古)、土師器(金・平)	
63	坪原遺跡	集落跡	土師器(古・金・平)、須恵器(古・金・平)	
64	屋遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古前・金・平)、須恵器(金・平)、灰釉陶器(赤血・平定)、紡錘石、砥石、鉄製品(鎌・鏃、刀子、釘)、瓦、内耳土器(中)、土師貫土器(中)、赤塗器(中)、埴り鉢(中)、石瓦、瓦葺土器(近)、埴器(近)	H5年、H6年度調査
65	中河内遺跡	集落跡	古墳(前)、土師器(金・平)	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪、形象埴輪、鉄刀(古)	前方後円墳1(2)、円墳1(2)
80	西草古墳群	古墳群	土師器(古)、円筒埴輪(古)、須恵器、勾玉、管玉、丸玉、壺玉、銅鐻、鉄鏡(古)	H27年、H28年度調査、復元後円墳1、円墳8(山)
94	権現山古墳群	古墳群		円墳1(2)
95	権現山墳穴群	墳穴群	土師器(古)、須恵器(古)、水晶製切子玉、ガラス製小玉(古)	横穴墓0(4)?
96	富士山古墳群	古墳群	土師器(古)、円筒埴輪、人物埴輪(古)	前方後円墳1(1)、円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪、形象埴輪、鉄刀(古)	前方後円墳1、円墳2(4)
98	台渡里廃寺跡	寺院跡/官路跡	ナイフ形石器、男女首冠型有柄尖頭器、銅片(先)、縄文土器(前、後～晩)、石器、弥生土器(後)、土師器(金・平)、須恵器(金・平)、墨書土器(平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒平瓦、貫平瓦、前戸瓦、隅切平瓦、文字瓦、瓦形、陶製網輪、赤信製品、鉄製品(釘、鏃)、青銅製品、鉄片、銅片、カクタク(中)、内耳土器(中)	S14～S19年、S46～S49年、H6年、H9～H10、H12～H18年度調査
99	田谷廃寺跡	寺院跡/官路跡	土師器(金・平)、須恵器(金・平)、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒平瓦、文字瓦(金・平)	
100	長者山城跡	城跡跡		H18年度調査、土器と埴が良好な状態まで遺存
123	渡里町遺跡	城跡跡	縄文土器(早・中・後)、土師器(古・金・平)、須恵器(金・平)、灰釉陶器(金・平)	H15年、H16年度調査
125	塚区遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、弥生土器(後)、土師器(古前、後)	
126	飯宮古墳群	古墳群		前方後円墳0(1)、円墳0(2)、洋風
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、土師器(金・平)、須恵器(金・平)、石製品、土製品、鉄製品、銅製品、軒平瓦(金・平)	
225	白石遺跡	城跡跡/集落跡	角形石器(先)、土師器(先)、土師器(早前)、有舌尖頭器(早前)、石鏃(早前)、縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器(古・金・平)、須恵器(古・金・平)、内耳土器(中)、陶器(中)、埴器(中)	H2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器(古前)	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器(金・平)、須恵器(金・平)	
229	一本松古墳	古墳	鉄刀	円墳0(1)、洋風
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器(後)、土師器(古)、陶器	円墳1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古・金・平)、須恵器(金・平)	
232	中河内郡跡	城跡跡		
236	台渡里遺跡	集落跡	縄文土器(晩)、土師器(古・金・平)、須恵器(古・金・平)、墨書土器(金)、炭化米(金・平)、軒平瓦、平瓦、鉄製刀子(古)、鉄製鎌(古)、砥石(古)、内耳土器(中)、陶器(近)、埴器(近)、銅鏡(近)、銅製箸(近)、砥石(近)	H6年、H8年、H14～H19年度調査

(用上・藤田・仁平・根本 1998)に加筆

(1) 先土器時代～縄文時代草創期

渡里町遺跡からは当該期の遺構・遺物は確認されていないが、台渡里廃寺跡やアラヤ遺跡、那珂川を挟んだ対岸の軍民坂遺跡と白石遺跡から、先土器時代～縄文時代草創期の石器が出土している。台渡里廃寺跡からは、平成16年度に行われた確認調査で、南方地区の塔基基礎掘込地業基底直下のローム層中からメノウの剥片、第2トレンチ(DWT04N-T2)からは硬質頁岩製の男女倉型有柄尖頭器が出土している。さらに平成18年度の長者山地区4区トレンチ1(DWT06C-4区T1)からもチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が1点出土している。また、アラヤ遺跡では硬質頁岩およびガラス質黒色安山岩製の槍先尖頭器が各1点出土している。(川口)

(2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、アラヤ遺跡、長者山遺跡、西原遺跡、阿川遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、小原内遺跡、塚宮遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、笠原神社古墳が該当する。これらのうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、砂川遺跡、軍民坂遺跡、白石遺跡のみであり、他の遺跡はすべて踏査により確認されている。

アラヤ遺跡は昭和26年と平成元年、平成18年に発掘調査が行われている。昭和26年の調査については、調査地点がはっきりしないため、平成元年に行われた調査を第1地点とし、平成18年度の調査を第2地点とする。水戸老人福祉センター「長者山荘」の建設に伴い実施された第1地点の調査では、遺構は台地縁に密集しており、縄文時代早期の堅穴状遺構8基が確認されている(井上編1992)。市道常磐10号線改良工事に伴い実施された第2地点の調査では、時期不明の縄文土器とともに磨石や石皿などが出土している(佐々木・川口・関口・新垣・渥美・木本 2007)。(川口)

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、長者山遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、富士山遺跡、小原内遺跡、堀遺跡、塚宮遺跡、白石遺跡、文京2丁目遺跡が該当する。発掘調査で遺構が確認されているのは堀遺跡だけであり、ほかは全て表面採集により弥生後期土器の出土が確認されている。堀遺跡からは弥生時代後期の堅穴住居跡が1軒検出されており、弥生土器の壺2個体と土師器の壺と埴が共伴する(井上・千葉・櫻村 1995)。(川口)

(4) 古墳時代

渡里町遺跡の周辺における古墳時代の集落跡は愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、長者山遺跡、阿川遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、富士山遺跡、小原内遺跡、坏渡里遺跡、堀遺跡、中河内遺跡、塚宮遺跡、白石遺跡、宮元遺跡、文京2丁目遺跡が該当する。これらの集落跡のうち発掘調査が行われているのは、白石遺跡、堀遺跡、塚宮遺跡である。白石遺跡からは、7世紀前葉の住居跡が3軒確認されている(櫻村 1993)。集落跡の周辺に営まれている古墳は、中期～終末期のものが確認されている。(渥美・川口)

(5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡のうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、堀遺跡、台渡里廃寺跡、砂川遺跡、白石遺跡である。

アラヤ遺跡は第1地点の調査の際に4軒の堅穴住居跡と工房跡1軒、掘立柱建物跡2棟、粘土採掘坑2基が確認されている。第2地点の調査では、1区において東西方向の区画溝が確認され、覆土から炭化米が出土していることから那賀郡衛正倉院の区画溝とみられる。また、同調査の4区では柱間7尺の掘立柱建物の柱穴も確認されており、正倉院に関連する建物の可能性がある。

台渡里廃寺跡の調査・研究は、高井悌三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする(高井 1964)。その成果を受け、昭和20年に長者山地区と観音堂山地区、南方地区の3地区が県指定史跡に指定された。

長者山地区は、炭化米が出土すること、瓦倉が4棟確認されていることから(高井 1964, 瓦吹 1991), 那賀郡衛正倉院と推定されていた(瓦吹 1991, 黒澤 1998)。平成 18 年度には、市教育委員会が行った範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と北側区画溝が確認され、郡衛正倉院であることが確定的になったといえる。

観音堂山地区については那賀郡衛政庁跡や河内駅家とする見解もあったが(瓦吹 1991, 外山 1994), 平成 14 年から 16 年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極には中門が配置される東向きの独自の伽藍配置をもつとみられ、その創建年代は7世紀後半に遡ることが明らかとなった(川口・小松崎・新垣編 2005, 川口 2006, 2007)。

南方地区についてはこれまででも寺院と考えられてきたが(高井 1964, 瓦吹 1991, 黒澤 1998), 平成 14 年から 16 年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、塔跡基壇の内部より内面黒色処理の施された土師器杯の破片が出土したことから、9世紀後半に入ってから造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。観音堂山地区の初期寺院が9世紀後半には火災で廃絶していることから、観音堂山地区の伽藍の焼亡後に、南方地区に再建しようとしたが、造営を途中で中止した可能性が高い(川口・小松崎・新垣編 2005)。従って、確認されなかった講堂は本来存在しない可能性が高い。なおこれらの成果に基づき、平成 17 年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。(瀧美・川口)

(6) 中世～近代

中世～近代の遺跡は長者山城跡、アラヤ遺跡、台渡里廃寺跡が挙げられる。長者山城跡は、これまで地形測量図や縄張り図が作成されたことはあったものの、発掘調査は行われていなかった。しかしながら、平成 18 年に水戸市教育委員会が行った個人住宅建設に伴う発掘調査で、15世紀後半～16世紀初頭の遺物が出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、長者山城跡の機能していた時期に関する手がかりが得られた。

アラヤ遺跡では、平成 18 年に実施された市道常磐 10 号線道路改良工事に伴う発掘調査の際に中世の長者山城跡に関連する瓦礫道が検出されている。

台渡里廃寺跡では、平成 6 年に実施された都市計画道路 3・6・30 号線敷設に伴う発掘調査で確認された第一号井戸址から、15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器、播鉢などが出土しており(井上・千葉 1995), 平成 15 年に行われた範囲確認調査では、土塁に沿う形で観音堂山地区の初期寺院の礎石を落とし込んだ溝跡が確認されており、カワラケや内耳土器などが出土していることから、観音堂山地区の初期寺院は少なくとも 15 世紀には寺院の存在はなく、長者山城跡の一角として機能していたことが推定されている(川口・小松崎・新垣編 2005)。

平成 17 年に行われた市道常磐 17 号線改良工事に伴う発掘調査では、4 区で確認されたゴミ穴より近世～近代の製品とみられるカワラケとともに益子焼の土瓶や土人形(恵比寿)が出土しており、近世村落の成立が 17 世紀前半まで遡ることを間接的に示す資料が得られた(佐々木・川口・大橋・林・瀧美 2006)。(川口・関口)

第3章 調査の方法と成果

3-1 調査の方法

調査区の座標は公共座標を基準に設定した。

調査対象地は幅2.0～2.4mほどの南北に細長い道路であるが、周辺住民の通行を確保するために5ヶ所にわたって調査区を設定し、北から南に向かって1～5区と呼称するとともに、歩行者通行スペースを除いた幅1.0～2.3mの部分について、順次、調査を実施した。調査総面積は128.9㎡を測るが、調査区はいずれも狭小であったことから、実際の作業には大きな制約が伴うことになった。

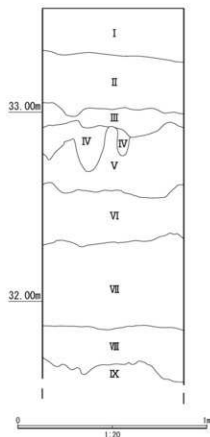
調査にあたっては、重機を用いて道路路盤と碎石層を撤去し、表土を除去した後、主として人力で遺構確認面までの掘り下げを行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて全点3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。（林）

3-2 基本土層

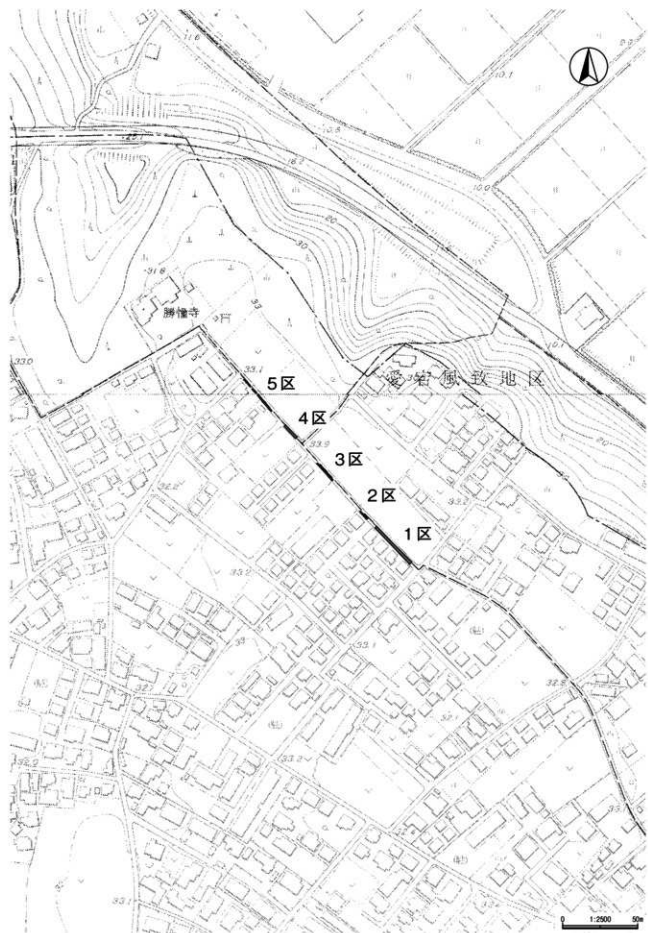
5区中央部において基本土層確認のためのテストピットを深く設け、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。

- I層 碎石・盛土層
- II層 10YR2/3 黒褐色土層 ローム粒を少量含む。粘性に欠けるが、しまる。
- III層 今市・七本桜軽石層 ローム粒・白色粒を少量含む。やや粘性をもち、しまる。
- IV層 10YR4/6 褐色ローム層 黒褐色粒を少量含む。粘性をもち、ややしまる。
- V層 10YR4/6 褐色ローム層 白色粒を微量含む。粘性をもち、しまる。
- VI層 10YR4/6 褐色ローム層 白色粒を微量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- VII層 10YR5/6 明褐色ローム層 黒色粒・赤色粒を微量含む。粘性をもち、しまる。
- VIII層 鹿沼軽石層
- IX層 10YR5/8 黄褐色粘土層 白色粒を少量含む。粘性をもち、しまる。

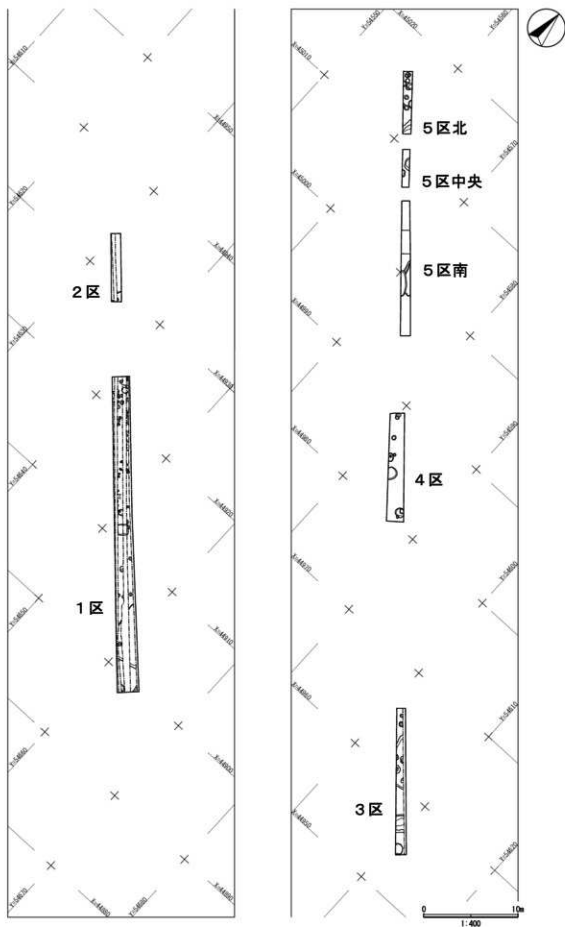
(林)



第3図 基本土層図



第4図 調査区の位置



第5図 調査区方眼図

3-3 遺構

1～5区より検出された遺構の内訳は、竪穴住居跡6軒、溝2条、土坑16基、ピット58基である。

以下では、各調査区ごとに検出された遺構の説明を行う。なお、ピットの多くはⅡ層中より掘り込まれており、大部分が中・近世の所産であったと考えられる。全体の7割以上が1区に集中しているが、いずれの場合でも規則的な配列状態を示すものや、性格の明らかなものは認められない。ピットの径は15～65cm、深さ21～81cmを測る。

(1) 1区の遺構

長さ33.9m、幅1.8～2.3mの南北に細長い調査区である。調査区の中央および東側、西側に水道管が南北方向に埋設されていたことから、この部分については調査を行うことはできなかった。Ⅱ層上面までの深さは0.2～0.6mに達した。

遺構としては、竪穴住居跡2軒(1・2号)、土坑9基(1・5・6・12・13・16～18・20号)、ピット45基が検出された。

1号竪穴住居跡

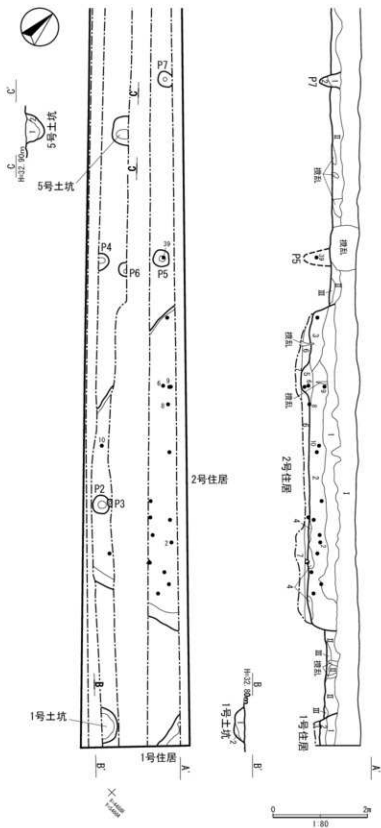
1区の南端に位置する。掘り込み面はⅡ層である。西壁と床面のごく一部が確認されただけであり、平面形・全体の規模・長軸方向などは不明である。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は32cmを測る。黄褐色土や暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に小さな起伏をもち、比較的堅緻である。周溝やピットは検出されなかった。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に小さな起伏をもち、床面からの深さは最大15cmを測る。遺物は須恵器片3点、土師器片1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して奈良・平安時代の所産であった可能性が強い。

2号竪穴住居跡

1区の南側に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、南・西壁および床面の一部が確認されただけであり、全体の規模は不明である。確認部分の南北の径は570cmを測る。推定長軸方向はN-7°-Wである。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は52cmを測る。暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもち、比較的堅緻である。周溝は検出されなかった。住居内より合計2基のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、口径10～40cm、深さ15～42cmを測り、本住居に伴う柱穴が含まれていた可能性が強い。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。中央部は比較的平坦であるが、壁際は一段深く掘り込まれている。床面からの深さは最大28cmを測る。遺物は縄文土器片32点、須恵器片64点、土師器片53点、灰釉陶器片2点、石器9点、軽石製品1点、金属製品2点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して8世紀後半、奈良時代の所産であった可能性が強い。

1号土坑

1区の南端に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は76cm、深さ22cmを



1号住居跡

- 10YK2/3暗褐色土層 ローム粒子を少量含む。粘性をもち、締まる。
- 10YK3/4暗褐色土層 ロームブロックを微量含む。粘性をもち、締まる。
- 10YR4/6黄褐色土層 暗褐色土を多量に含む。粘性をもち、締まる。

2号住居跡

- 10YK2/3暗褐色土層 ローム粒子を少量含む。粘性をもち、締まる。
- 10YR4/4褐色土層 ローム粒子・ロームブロックを少量。暗褐色土を微量含む。粘性をもち、締まる。
- 10YK3/4暗褐色土層 ローム粒子・ロームブロックを少量。炭化物を微量含む。粘性をもち、締まる。
- 10YK2/3黒褐色土層 ローム粒子を少量含む。粘性をもち、やや硬まりに欠ける。
- 10YK3/4暗褐色土層 ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。粘性をもち、やや締まる。
- 10YR4/4褐色土層 (陥没面) ロームブロックを多量、ローム粒子・暗褐色土を微量含む、やや粘性をもち、締まる。
- 10YR4/4褐色土層 (陥没面) ロームブロックを多量、暗褐色土を少量含む。粘性をもち、やや締まる。

1号土坑

- 10YK2/3黒褐色土層 ローム粒を微量含む。粘性をもち、しめる。
- 10YR4/4褐色土層 ローム粒を多量含む。粘性をもち、ややしまりに欠ける。

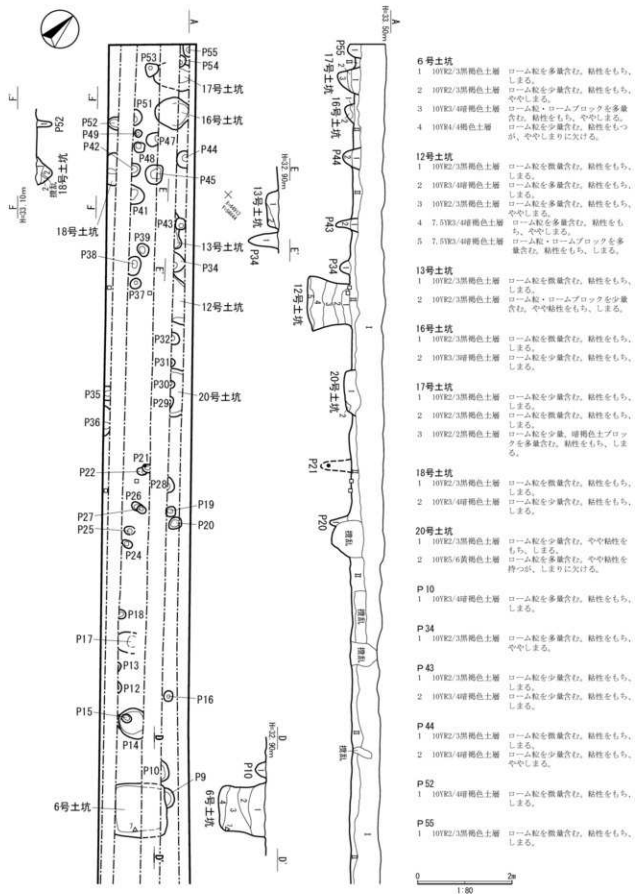
5号土坑

- 10YK2/3黒褐色土層 ローム粒を少量含む。やや粘性をもち、しめる。
- 10YK3/4暗褐色土層 ローム粒を多量含む。粘性をもち、ややしめる。

P7

- 10YK3/3黒褐色土層 炭化物・ローム粒を微量含む。粘性をもち、しめる。
- 10YK2/3黒褐色土層 ローム粒を少量含む。粘性をもち、しめる。

第6図 1区遺構図(1)



第7図 1区遺構図(2)

測る。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸みをもつ。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が強い。

5号土坑

1区の中央部南寄りに位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は不整な円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は62cm、深さ40cmを測る。断面は開いた筒状ないし鍋底状を呈し、坑底は丸みをもつ。遺物は縄文土器片2点、須恵器片1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古墳時代の所産であった可能性が強い。

6号土坑

1区のほぼ中央部に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。確認部の南北の径は116cm、深さ100cmを測る。断面は筒状ないし袋状を呈し、中位よりやや開き気味に立ち上がる。坑底はやや丸みをもつ。遺物は縄文土器片4点、須恵器片9点、土師器片14点、陶器片1点、砥石2点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が強い。

12号土坑

1区の北側に位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不整な円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は98cm、深さ90cmを測る。断面は袋状を呈し、坑底は丸みをもつ。遺物は縄文土器片2点、須恵器片3点、土師器片1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して縄文時代早期後葉、条痕文系土器の時期の所産であった可能性が強い。

13号土坑

1区の北側に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は不整な楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は76cm、深さ26cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、坑底はやや丸みをもつ。遺物は縄文土器片1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が強い。

16号土坑

1区の北端近くに位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不整な楕円形を呈する。確認部の東西の径は70cm以上、深さ20cmを測る。長軸方向はN-44°-Eである。断面は鍋底状に近く、坑底は丸みをもつ。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が強い。

17号土坑

1区の北端に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は不整な楕円形を呈するものと思われるが、一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の東西の径は80cm以上、深さ48cmを測る。長軸方向はN-52°-Eである。断面は筒状に近く、坑底は丸みをもつ。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が強い。

18号土坑

1区の北側に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は68cm、深さ34cmを測る。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸みをもつ。遺物は土師器片1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

20号土坑

1区の中央部北側に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は102cm、深さ30cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、坑底はやや丸みをもつ。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が高い。

ビット群

合計45基のビットが検出された。調査区の北側から中央部南寄りに散在しており、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径16～64cm、深さ20～61cmを測る。5号ビットより縄文土器片1点、須恵器片2点、土師器片1点、21号ビットより土師器片1点、24号ビットより須恵器片1点、土師器片2点、44号ビットより須恵器片2点、53号ビットより縄文土器片2点、剥片1点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して縄文時代から中・近世に至るビットが混在している可能性が高い。

(2) 2区の遺構

長さ7.2m、幅1.0～1.1mの南北に細長い調査区である。調査区のほぼ中央部に水道管が南北方向に埋設されていたことから、この部分については調査を行うことはできなかった。Ⅱ層上面までの深さは0.3～0.4mに達した。

遺構としては、調査区の南端から土坑1基(22号)、ビット1基が検出された。

22号土坑

2区の中央部北側に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は108cm、深さ40cmを測る。断面は筒状に近く、坑底は起伏をもつ。遺物は須恵器片1点、土師器片3点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

ビット

調査区南端から1基のビットが検出されただけであり、口径30cm、深さ25cmを測る。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が高い。

(3) 3区の遺構

長さ15.5m、幅1.0～1.2mの南北に細長い調査区である。調査区の東側に水道管が南北方向に埋設されていたことから、この部分については調査を行うことはできなかった。Ⅱ層上面までの深さは0.2～0.4mに達した。

遺構としては、調査区北端から中央部にかけて竪穴住居跡2軒(4・5号)、調査区南側から溝1条(1号)、土坑1基(23号)が検出された。

4号竪穴住居跡

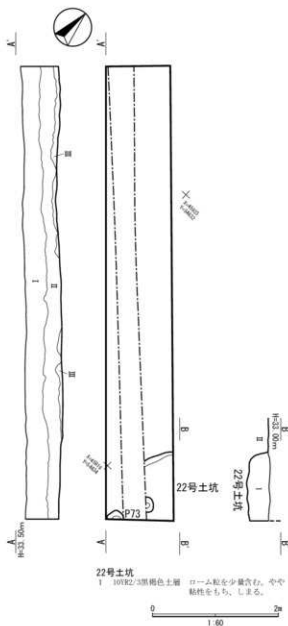
3区の中央部北寄りに位置する。北側で5号竪穴住居跡を切る。掘り込み面はⅡ層である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、南・西壁および床面の一部が確認されただけであり、全体の規模は不明である。確認部分の南北の径は570cmを測る。推定長軸方向はN-8°-Wである。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は80cmを測る。暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。周溝は検出されなかった。住居内より合計4基のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、口径40~71cm、深さ43~87cmを測り、本住居に伴う柱穴が含まれていた可能性が強い。掘り方は部分的であり、壁際には認められなかった。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大15cmを測る。遺物は縄文土器片3点、須恵器片31点、土師器片217点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して9世紀中葉、平安時代の所産であった可能性が強い。

5号竪穴住居跡

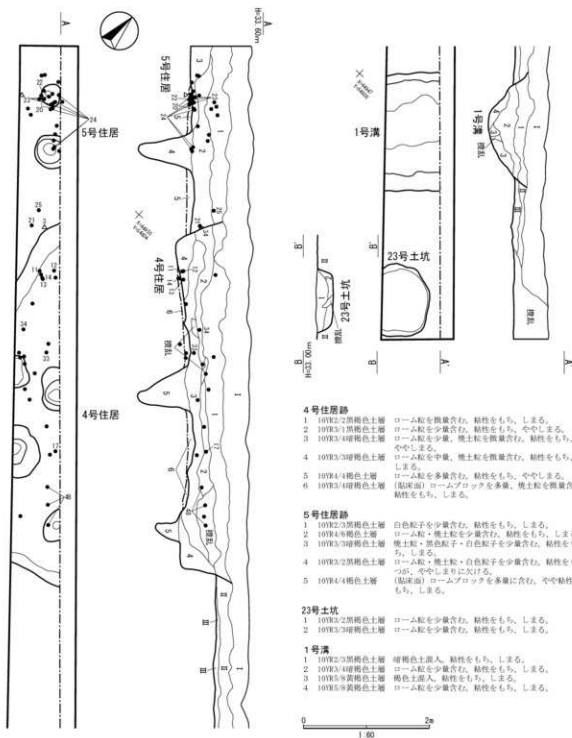
3区の北端に位置する。南側を4号竪穴住居跡に切られる。掘り込み面はⅡ層である。床面の一部が確認されただけであり、平面形・全体の規模・長軸方向などは不明である。褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。周溝の分布は不明である。住居内より合計2基のピットが検出された。口径39~55cm、深さ20~88cmを測り、本住居に伴う柱穴が含まれていた可能性が強い。掘り方は部分的であり、北側には認められなかった。全体的に小さな起伏をもち、床面からの深さは最大12cmを測る。遺物は縄文土器片7点、弥生土器1点、須恵器片7点、土師器片108点、石器3点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して7世紀後半~8世紀前半、古墳時代~奈良時代の所産であった可能性が強い。

1号溝

3区の南側に位置する。掘り込み面はⅡ層である。調査区を東西にはほぼ直進しているが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は0.9m、上幅1.9m以上、底幅0.7m



第8図 2区遺構図



第9図 3区遺構図

以上、深さ72cmを測る。主軸の方向はN-49°-Eである。断面は開いたU字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は325mを測る。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

23号土坑

3区の南端に位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思わ

れるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の南北の径は112cm、深さ30cmを測る。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸みをもつ。遺物は土師器片2点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

(4) 4区の遺構

長さ11.3m、幅1.0～1.8mの南北に細長い調査区である。Ⅱ層上面までの深さは0.2～0.4mに達した。

遺構としては、調査区の広い範囲から土坑2基(24・25号)、ピット6基が検出された。

24号土坑

4区の南端に位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。南側をP59に切られる。平面形は略円形を呈するものと思われるが、一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の南北の径は105cm、深さ50cmを測る。断面は筒状を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。坑底は起伏をもち、北側が浅く凹む。遺物は縄文土器片1点、須恵器片3点、土師器片3点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して縄文時代早期前葉、燃糸文系土器の稲荷台式期の所産であった可能性が高い。

25号土坑

4区のはほぼ中央部に位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の南北の径は131cm、深さ20cmを測る。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸みをもつ。遺物は縄文土器片1点、須恵器片5点、土師器片19点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して縄文時代中期前葉、阿玉台I b式期の所産であった可能性が高い。

ピット群

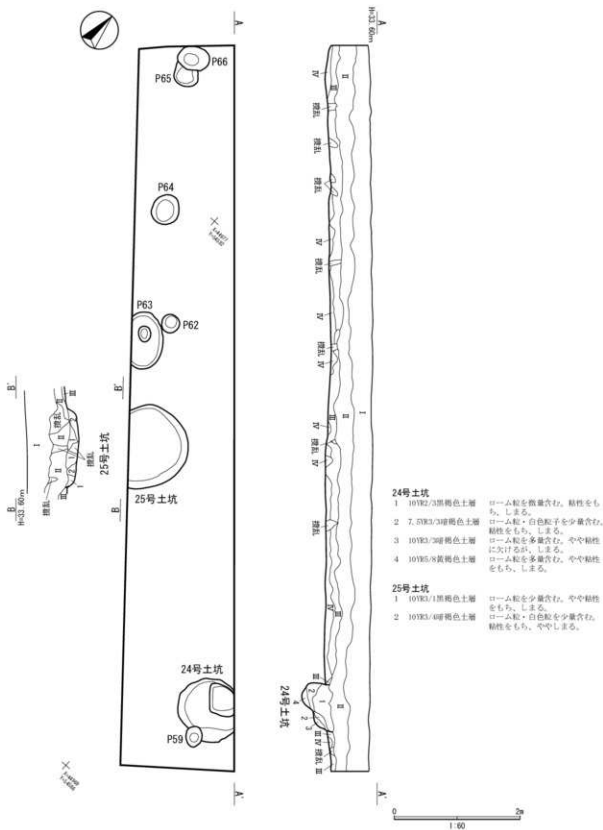
合計6基のピットが検出された。調査区の広い範囲に散在しており、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径25～88cm、深さ16～41cmを測る。66号ピットより土師器片1点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して古代から中・近世に至るピットが混在していた可能性が高い。

(5) 5区北側の遺構

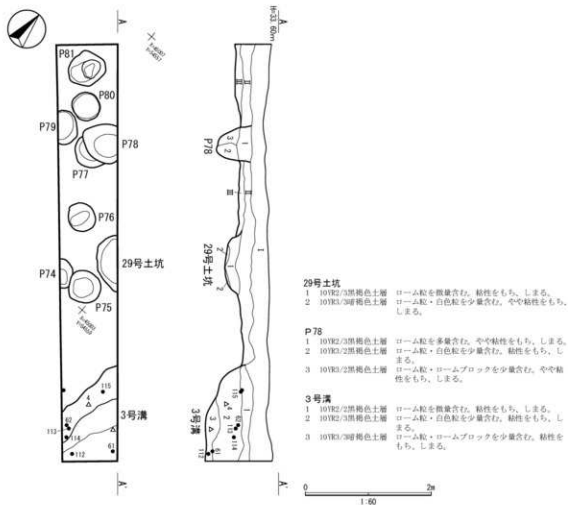
長さ6.5m、幅0.9～1.0mの南北に細長い調査区である。Ⅱ層上面までの深さは0.2～0.4mに達した。遺構としては、調査区の広い範囲から溝1条(3号)、土坑1基(29号)、ピット8基が検出された。

3号溝

5区北側の南端に位置する。掘り込み面はⅡ層である。調査区を北東方向から南西方向に走るが、両端が調査区域外にかかっており、全容は不明である。確認部分の全長は1.3m、上幅1.1m以上、底幅0.4m以上、深さ72cmを測る。主軸の方向はN-10°-Eである。断面は開いたU字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は32.5mを測る。遺物は縄文土器片21点、弥生土器片29点、須恵器片1点、磁器片3点、陶器片2点、石器6点、砥石1点が出土している。出土遺物や遺構の形



第10図 4区遺構図



第11図 5区北側遺構図

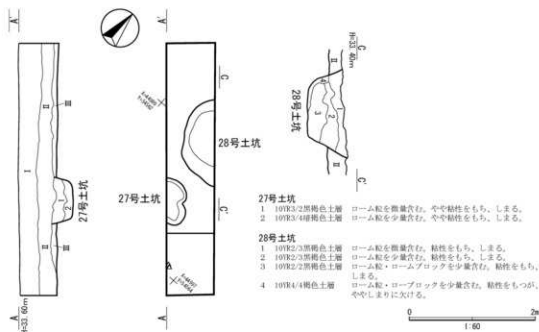
状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

29号土坑

5区北側のはほぼ中央部に位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は90cm、深さ20cmを測る。断面は鍋底状に近く、坑底は丸みをもつ。遺物は須恵器片1点が出土している。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

ビット群

合計8基のビットが検出された。調査区の中央部南寄りから北側に集中分布しているが、配列に明瞭な規則性は認められなかった。口径40～65cm、深さ23～81cmを測る。74号ビットより縄文土器片1点、77号ビットより須恵器片2点、79号ビットより須恵器片1点、80号ビットより縄文土器片5点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して縄文時代から中・近世に至るビットが混在していた可能性が高い。



第12図 5区中央部遺構図

(6) 5区中央部の遺構

長さ3.9m、幅0.8mの南北に細長い調査区である。Ⅱ層上面までの深さは0.3～0.6mに達した。遺構としては、調査区のほぼ中央部から土坑2基(27・28号)が検出された。

27号土坑

5区中央部の中央部南寄りに位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は76cm、深さ35cmを測る。断面は筒状を呈し、壁は比較的急傾斜で掘り込まれている。坑底はやや丸みをもつ。遺物は縄文土器片2点、須恵器片2点、石器1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して縄文時代早期前葉、撚糸文系土器の稲荷台式期の所産であった可能性が高い。

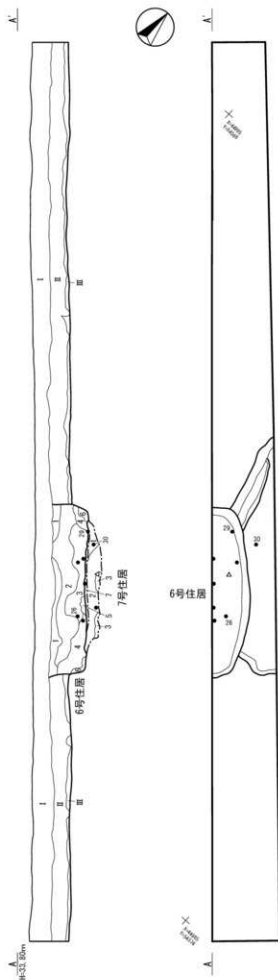
28号土坑

5区中央部の中央部北寄りに位置する。掘り込み面はⅡ層である。平面形は不整な円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の南北の径は135cm、深さ66cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、壁は比較的急傾斜で掘り込まれている。坑底は比較的平坦である。遺物は縄文土器片1点、須恵器片1点、土師器片1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

(7) 5区南側の遺構

長さ14.1m、幅0.8～1.1mの南北に細長い調査区である。Ⅱ層上面までの深さは約0.2～0.4mに達した。

遺構としては、調査区の中央部南寄りから竪穴住居跡(6・7号)が検出された。



6号住居跡

- 1 10YR2/2黒褐色土層 ローム粒を多数含む。粘性をもち、しまる。
- 2 10YR2/2黒褐色土層 ローム粒を少量含む。粘性をもち、しまる。
- 3 10YR3/2黒褐色土層 ローム粒・ロームブロックを少量含む。やや粘性をもち、しまる。
- 4 10YR2/2黒褐色土層 ローム粒を多数含む。粘性をもち、ややしまる。
- 5 10YR3/2黒褐色土層 ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性をもち、しまる。
- 6 10YR4/4褐色土層 粘土粒を少量含む。粘性に欠けるが、しまる。
- 7 10YR3/3暗褐色土層 (陥床面) ローム粒・ロームブロックを少量含む。やや粘性をもち、しまる。

7号住居

- 1 10YR2/2黒褐色土層 (陥床面) 粘土粒・ロームブロックを少量含む。粘性を持ち、締まる。
- 2 10YR3/4暗褐色土層 (陥床面) ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性を持ち、締まる。
- 3 10YR4/4褐色土層 (陥床面) ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性を持ち、締まる。

第13図 5区南側遺構図

6号竪穴住居跡

5区南側の中央部南寄りに位置する。東側で7号竪穴住居跡を切る。掘り込み面はⅡ層である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、北・東・南壁および床面の一部が確認されただけであり、全体の規模は不明である。確認部分の南北の径は270cmを測る。推定長軸方向はN-44°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は60cmを測る。暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。周溝やピットは検出されなかった。掘り方は部分的であり、壁際には認められなかった。全体的に小さな起伏をもち、床面からの深さは最大9cmを測る。遺物は縄文土器片3点、弥生土器片3点、須恵器片29点、土師器片44点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して9世紀中葉、平安時代の所産であった可能性が高い。

7号竪穴住居跡

5区南側の中央部南寄りに位置する。西側を6号竪穴住居跡切られる。掘り込み面はⅡ層である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、南・西壁および床面の一部が確認されただけであり、全体の規模は不明である。確認部分の南北の径は300cm以上を測る。推定長軸方向はN-15°-Wである。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は55cmを測る。黒褐色土や暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、比較的堅緻である。西壁にそって周溝の一部分が検出された。幅10～18cm、深さ5～8cmを測る。住居内よりピットは検出されなかった。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大28cmを測る。遺物は縄文土器片7点、弥生土器片3点、須恵器片3点、土師器片155点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して9世紀前半～中葉、平安時代の所産であった可能性が高い。

(林)

第2表 ピット一覧

遺構番号	調査区	平面形態	規模長径 (cm)	規模短径 (cm)	断面形態	確認標高 (m)	確認面からの深さ (cm)	出土遺物
P4	1区	推定不整形	(36)	(36)	逆円錐状形	32.7	23	-
P5	1区	円形	34	34	逆円錐状形	32.7	54	縄文土器・土師器・須恵器
P6	1区	推定円形	(30)	(30)	逆円錐状形	32.7	24	-
P7	1区	推定不整形	(36)	30	逆円錐状形	32.7	22	-
P9	1区	推定楕円形	(42)	(38)	逆円錐状形	32.7	26	-
P10	1区	推定楕円形	(46)	(40)	筒状	32.7	20	-
P12	1区	推定円形	(24)	(24)	逆円錐状形	32.7	24	-
P13	1区	推定円形	(20)	(20)	逆円錐状形	32.7	25	-
P14	1区	推定不整形	64	(52)	逆台形	32.7	35	-
P15	1区	-	-	-	-	32.7	25	-
P16	1区	円形	21	18	逆円錐状形	32.7	26	-
P17	1区	推定楕円形	45	37	逆台形	32.7	25	-
P18	1区	推定円形	(20)	(20)	逆円錐状形	32.7	22	-
P19	1区	円形	24	22	逆円錐状形	32.7	35	-

P20	1区	不整円形	32	22	逆円錐形状	32.7	41	-
P21	1区	推定不整円形	(20)	18	筒状	32.7	61	土師器
P22	1区	推定楕円形	16	(10)	逆台形	32.7	23	-
P24	1区	楕円形	24	16	逆円錐形状	32.7	24	土師器・須 恵器
P25	1区	楕円形	24	16	逆円錐形状	32.7	24	-
P26	1区	推定楕円形	(26)	18	逆台形	32.7	25	-
P27	1区	楕円形	20	16	逆台形	32.7	28	-
P28	1区	推定楕円形	(32)	27	逆台形	32.7	26	-
P29	1区	推定楕円形	(24)	18	逆円錐形状	32.7	34	-
P30	1区	推定円形	(16)	(16)	逆円錐形状	32.7	38	-
P31	1区	推定円形	(18)	(18)	逆円錐形状	32.7	22	土師器・須 恵器
P32	1区	推定不整円形	(31)	(24)	逆円錐形状	32.7	37	土師器
P34	1区	推定不整円形	40	39	逆台形	32.7	25	-
P35	1区	推定円形	(21)	-	逆円錐形	32.7	31	-
P36	1区	推定楕円形	-	-	逆台形	32.7	25	-
P37	1区	円形	24	21	逆円錐形	32.7	41	-
P38	1区	推定楕円形	40	(26)	筒状	32.7	37	-
P39	1区	不整楕円形	28	21	逆円錐形	32.7	31	-
P41	1区	推定不整楕円形	(40)	38	逆台形	32.7	38	-
P42	1区	推定円形	28	(28)	逆円錐形	32.7	41	-
P43	1区	不整円形	24	24	逆円錐形	32.7	33	-
P44	1区	推定円形	(36)	(36)	逆円錐形	32.7	27	須恵器
P45	1区	推定不整円形	44	40	逆台形	32.7	31	-
P47	1区	不整円形	(31)	26	逆円錐形	32.7	32	-
P48	1区	不整円形	24	24	筒状	32.7	35	-
P49	1区	円形	16	16	筒状	32.7	31	-
P51	1区	推定円形	(35)	(34)	逆円錐形	32.7	37	-
P52	1区	推定円形	(28)	(26)	逆円錐形	32.7	31	-
P53	1区	不整円形	28	26	逆台形	32.7	27	縄文土器・ 剥片
P54	1区	推定円形	(28)	(26)	逆台形	32.7	28	-
P55	1区	推定円形	-	-	逆円錐形	32.7	23	-
P59	4区	円形	32	28	逆台形	32.8	27	-
P62	4区	円形	28	28	筒状	32.8	23	-
P63	4区	推定楕円形	88	(64)	皿状	32.8	18	-
P64	4区	円形	48	44	逆台形	32.8	16	-
P65	4区	推定不整円形	(40)	(38)	逆円錐形	32.8	19	-
P66	4区	不整楕円形	50	36	逆円錐形	32.8	41	土師器
P73	2区	推定円形	(30)	(27)	逆台形	32.8	25	-
P74	5区	推定不整円形	(45)	(40)	逆台形	32.9	39	縄文土器
P75	5区	円形	54	52	逆台形	32.9	43	-
P76	5区	不整円形	48	42	逆台形	32.9	47	-
P77	5区	推定不整円形	(50)	(50)	逆台形	32.9	52	須恵器
P78	5区	推定不整円形	64	60	逆台形	32.9	48	-
P79	5区	推定不整円形	(54)	(45)	逆台形	32.9	40	須恵器
P80	5区	円形	46	44	筒状	32.9	81	縄文土器
P81	5区	推定不整円形	65	58	逆台形	32.9	23	-

3-4 遺物

今回の調査地点からは縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、古代瓦、陶器、磁器、瓦質土器、打製石斧、台石、磨石、楔形石器、R・F、剥片、石核、砥石、編物石、鎌、鉄滓などが遺物取納箱にして約5箱分、1,718点、26,005kg出土した。主体となるのは古墳時代～平安時代の須恵器と土師器、特に土師器であり、須恵器の459点、7,151kg、土師器の899点、9,120kgをあわせると、点数では出土遺物全体の79%、重量では同じく全体の62%に達する。調査区別では3区出土遺物をもっとも多く、681点、9,967kgと、点数・重量とも全体の40%近くを占める。これに次ぐのが1区出土遺物の470点、8,066kgであり、同じく全体の30%前後を占める。

1. 土器

縄文土器212点、弥生土器51点が1区を中心に出土している。いずれも小破片である。表土や2号住居跡、3号溝などの他時期の遺構内より流れ込みの状態を確認されたものが大部分であり、同時期の遺構に明確に伴うものは少ない。縄文土器のうち、型式の明らかなものには早期前葉・稲荷台式土器・天矢場式土器、中葉・田戸下層式土器、後葉・条痕文系土器、中期前葉・阿玉台I b・II式土器、後葉・加曾利E I・Ⅲ式土器、晩期中葉・大洞C1式土器などが含まれる。弥生土器は後期・十王台式土器がほとんどである。

出土土器の主体を占める古墳時代～平安時代の須恵器と土師器は、時間的におおむね7期に分けることができる。1期は5世紀頃に比定される。1区5号ピット出土の土師器壺の口縁部破片が該当する。2期は6世紀前半に比定される。1区出土の土師器杯が該当する。3期は7世紀後半～8世紀前半に比定される。須恵器蓋や土師器杯・小型甕などが出土している。注目されるのは3区5号住居跡から出土した土師器小型甕39であり、胴下半部には長径8cmの意図的な穿孔が認められる。4期は8世紀中頃に比定される。須恵器杯が出土しているが、1期・2期同様、該当する資料は少ない。5期は8世紀後半～9世紀前半に比定される。須恵器の高台付杯、灰軸陶器の鉢・短頸壺などが出土している。6期に次いで出土量は多いが、土師器の出土は比較的少ない。6期は9世紀中頃に比定される。今回の調査ではもっとも出土量が多く、須恵器の杯・高台付杯・盤・甕、土師器の甕などが出土している。墨書土器や窺書き土器が見られるようになるのもこの時期であるが、文字の判読ができたものは底部に「十」の字が墨書された5区7号住居跡出土の須恵器高台付杯例68と、同じく底部に「十」の窺書きが施された1区2号住居跡出土の土師器杯11のみにとどまる。7期は10世紀前半に比定される。3区出土の灰軸陶器の碗42などが該当するが、出土量は限られる。

中・近世に属するものとしては陶磁器25点、瓦質土器2点が出土している。細片のため正確な時期の不明な例が多い。14は1区6号土坑出土の古瀬戸系の灰軸鉦皿である。

2. 瓦

平瓦8点、鬘斗瓦2点、瓦種不明のもの1点が出土している。平瓦凸面の調整の内訳は平瓦ナデ調整1点、平瓦ケズリ調整3点、平瓦長縄叩き調整4点、鬘斗瓦ナデ調整1点、鬘斗瓦糸切り1点である。このうち、鬘斗瓦糸切りはひたちなか市原の寺瓦窯跡出土資料と共通する特徴をもつ。4区出土の47を含めて、その他のものは胎土にチャートや海綿骨針などを含む水戸市木葉下窯跡群産である。遺構に伴うものはない。

3. 石器

打製石斧3点、台石1点、磨石4点、楔形石器4点、R・F4点、剥片21点、石核3点、砥石6点、編物石2点が出土している。打製石斧、台石、磨石、楔形石器、R・F、剥片、石核などは縄文時代のものと思われるが、同時期の遺構に伴う例は認められない。砥石6は1区2号住居跡、砥石15は1区6号土坑から出土した。6は奈良時代、15は中世に伴うものであろう。編物石は1区2号住居跡および3区5号住居跡より出土した。

4. 金属製品

鎌1点、鉄滓2点が出土した。鎌13は1区2号住居跡の攪乱部分、鉄滓は1区表土層で確認されたものであり、正確な時期は不明である。

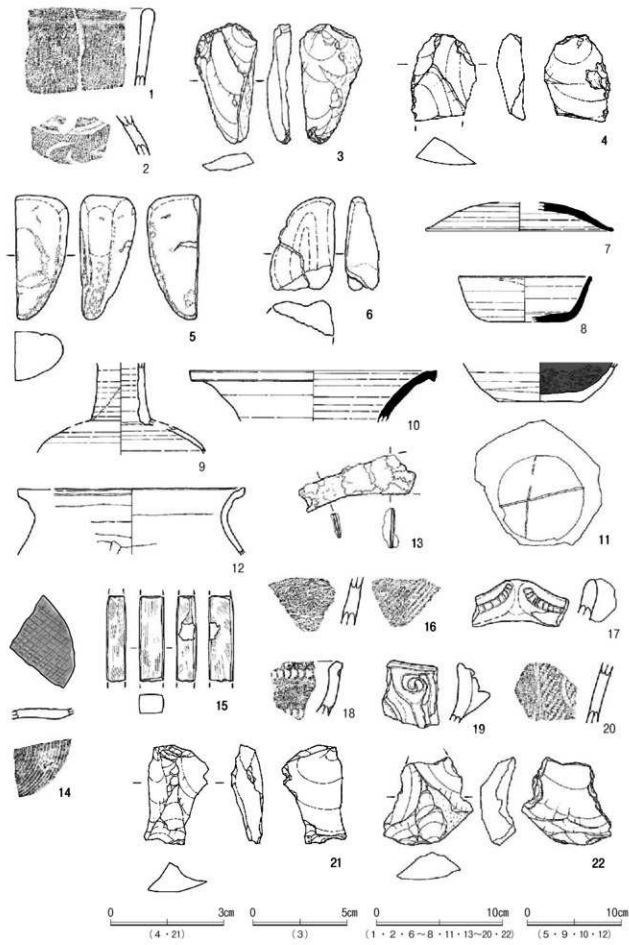
5. 文字資料

①墨書

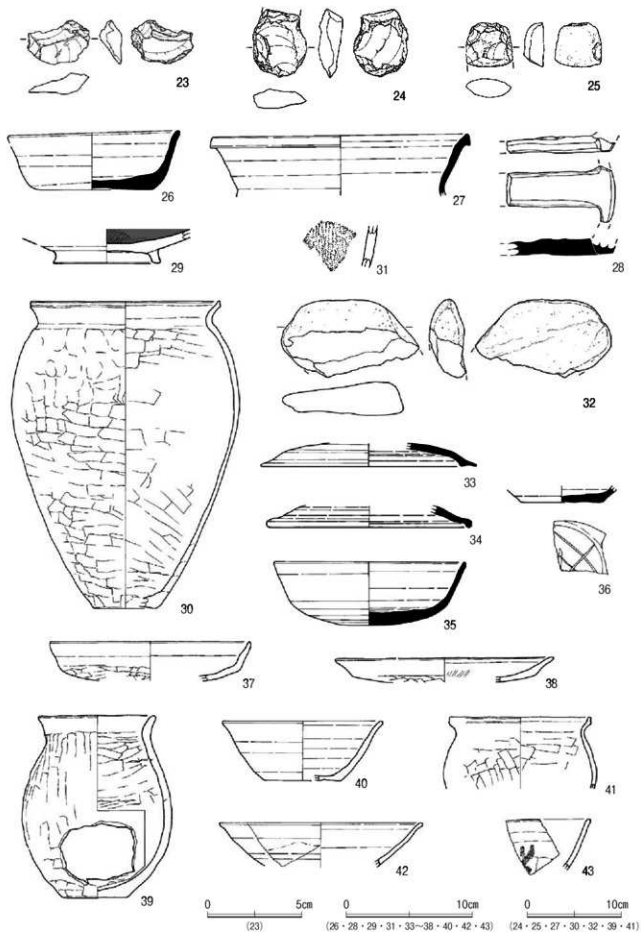
体部外面に文字種不明の墨書が施された3区出土の土師器坏43、底部に「十」の字が描かれた5区7号住居跡出土の須恵器高台付坏68などがある。

②窠書き

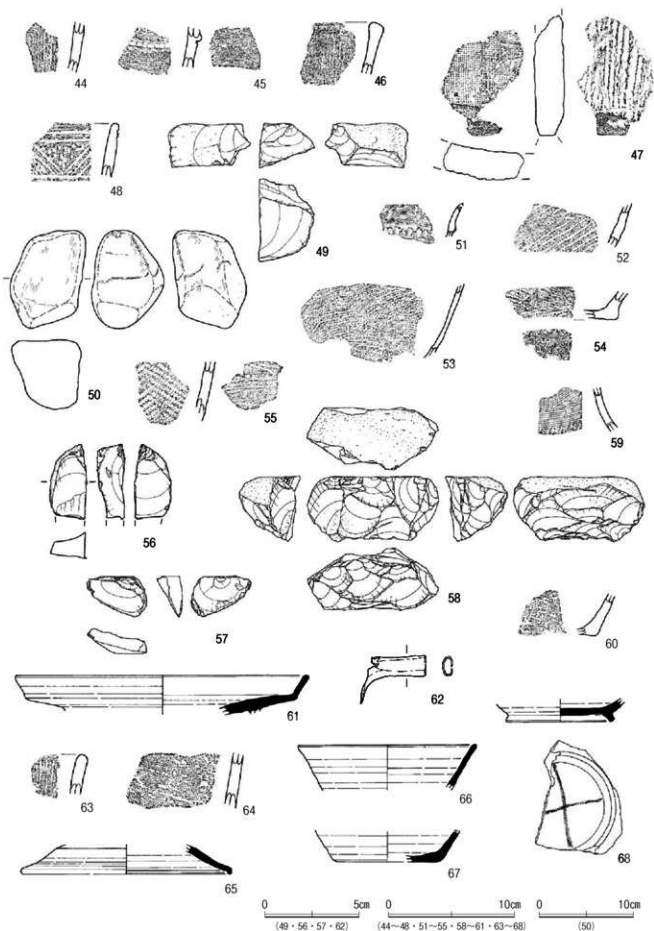
底部に「十」の窠書きが施された1区2号住居跡出土の土師器坏11、同じく底部に文字種不明の窠書きが施された3区5号住居跡出土の須恵器坏36などがある。 (林)



第 14 圖 出土遺物 (1)



第15圖 出土遺物(2)



第16図 出土遺物(3)

第3表 出土土器属性一覧

図号	出土地点	種類	器種	口径 <推定口径> (cm)	底径 <推定底径> (cm)	高さ (推定高さ) (cm)	特徴・手法	胎土	海陸焼	焼成	色調	備考
1	1区 2号住居	縄文土器	口縁部	-	-	-	口縁部やや肥厚、熱赤文し。	白色粒子・石膏少量、炭粉粒多量	○	良好	内外面：10YR5/4 に濃い黄褐色	早期黄赤・稲敷白式土器。
2	1区 2号住居	縄文土器	胴部	-	-	-	胴部沈線文のこめる。滑潤縄文、面影土器。	白色粒子・炭粉・砂粒少量	○	良好	内外面：10YR6/4 に濃い黄褐色	中期黄赤・大洲C1式土器。
7	1区 2号住居	原始器	蓋	<145>	-	(23)	天舟部湾折込みなし。先端部面取り、かぶりなし。天舟部上縁斜傾ヘラズリ、下位・内面ロコ口成形によるヨコナデ。	白色粒子少量、炭粉少量	○	良好	内外面：5Y6/1 灰色	本葉下流跡群。
8	1区 2号住居	原始器	杯	<103>	<6.0>	<3.6>	口縁部ヨコナデ。体部僅かに内湾。ロコ口成形によるヨコナデ。底部斜傾ヘラ切り後未調整。二区底面斜傾ナデ。口縁部外面自然焼。	白色粒子・チャート少量	○	良好	内外面：25Y7/1 灰白色	本葉下流跡群。黒色炭屑物少量。
9	1区 2号住居	灰燻陶器	長皿形	-	-	(66)	外縁に胎土を貼り付ける。内外面ロコ口成形によるヨコナデ。胴部斜傾ヘラ切り後未調整。	黒色粒子少量	○	良好	内外面：25Y8/2 灰白色	本葉下流跡群。
10	1区 2号住居	原始器	甕	<25.8>	-	(53)	口縁部「丁」字状。胴部大きく開き外反。内外面ロコ口成形によるヨコナデ。外面自然焼。	白色粒子・チャート・砂粒少量	○	良好	外面：25Y3/1 黒褐色 内面：25Y6/1 灰白色	本葉下流跡群。
11	1区 2号住居	土師器	杯	-	6.6	(30)	体部僅かに内湾。体部ロコ口成形によるヨコナデ。体部内面ミダシ。底部斜傾ヘラ切り後未調整。	白色粒子多量	○	良好	外面：10YR6/3 に濃い黄褐色 内面：25Y2/1 褐色	内裏、底部斜傾ナデ。
12	1区 2号住居	土師器	甕	<23.9>	-	(69)	口縁部上方につままれる。口縁部内外面ヨコナデ。蓋部「丁」字状。胴部内面ヘラナデ。外面ヘラナズリ。	白色粒子・炭粉粒少量	○	良好	内外面：75YR5/4 に濃い黄褐色	常盤型甕。
14	1区 6号土坑	陶器	御出	-	-	-	底部斜傾赤切り。内面格子状に沈線。内外面灰焼。	赤	-	良好	外面：25Y7/2 灰褐色 内面：10Y5/2 オリブ灰色	古瀬口系。
16	1区 13号土坑	縄文土器	胴部	-	-	-	内外面斜傾の条状文。	織物少量、白色粒子少量	-	不良	外面：75YR7/8 黄褐色 内面：10YR2/4 に濃い黄褐色	早期黄赤・条状文系土器。
17	1区 表土一拵	縄文土器	口縁部	-	-	-	或部筋より角押文。	白色粒子・砂粒少量、炭粉粒少量	○	良好	内外面：5YR5/6 明赤褐色	中期黄赤・阿玉台Ⅱ式土器。
18	1区 表土一拵	縄文土器	口縁部	-	-	-	口縁に沿って角押文施化。	白色粒子多量、チャート・砂粒少量	○	良好	内外面：25YR5/8 明赤褐色	中期黄赤・阿玉台Ⅱ式土器。
19	1区 表土一拵	縄文土器	口縁部	-	-	-	口縁部に渦巻状突起。	白色粒子・チャート少量	-	良好	内外面：10YR8/6 黄褐色	中期黄赤・加賀料Ⅱ式土器。
20	1区 表土一拵	縄文土器	胴部	-	-	-	耳し縄文、滑潤縄文。	白色粒子・砂粒少量、炭粉粒少量	○	良好	外面：75YR7/6 褐色 内面：75YR4/2 灰褐色	中期黄赤・加賀料Ⅱ式土器。
26	1区 表土一拵	原始器	杯	<132>	4.6	8.7	口縁部僅かに外反。体部全面的に立上がる。内外面ロコ口成形によるヨコナデ。下縁斜傾ヘラズリ。底部斜傾ヘラ切り後ナデ。底部灰焼。	白色粒子・砂粒少量	-	良好	内外面：5Y7/2 灰白色	本葉下流跡群。
27	3区 4号住居	原始器	甕	<27.0>	-	(63)	口縁部「丁」字状。ロコ口成形によるヨコナデ。胴部大きく開き直線的に立上がる。	白色粒子・チャート少量	○	良好	内外面：75YR6/2 灰褐色	本葉下流跡群。
28	3区 4号住居	原始器	瓶	-	-	-	底部1本アブリッジ。側面面取り3回。	砂粒少量	-	良好	内外面：25Y8/4 浅黄褐色	本葉下流跡群。
29	3区 4号住居	土師器	高台付杯	-	6.0	(20)	体部内面ミダシ。外面ロコナデ。底部斜傾ヘラ切り後未調整。高台直断面外面斜傾外反。	白色粒子・チャート少量	○	良好	外面：10YR7/3 に濃い黄褐色 内面：25Y2/1 褐色	内裏。
30	3区 4号住居	土師器	甕	199	6.6	32.5	口縁部上方につままれる。口縁部内外面ヨコナデ。蓋部「丁」字状。内面胴部上位傾ヘラナデ。胴部中～下位ヘラナデ及びナデ。外面上段～中位ヘラナズリ後ナデ。胴部下段斜傾方向ヘラナズリ。一部に輪転面。	白色粒子・チャート・砂粒少量	○	良好	内外面：5YR5/6 明赤褐色	常盤型甕。
31	3区 5号住居	縄文土器	胴部	-	-	-	熱赤文し。	白色粒子少量、砂粒少量	○	良好	外面：5YR6/8 褐色 内面：10YR5/4 に濃い黄褐色	早期黄赤・稲敷白式土器。
33	3区 5号住居	原始器	蓋	<16.9>	-	-	天舟部湾折込みなし。僅かな球状のかぶり。ロコ口成形によるヨコナデ。	白色粒子・砂粒少量	○	良好	内外面：25Y5/1 黄褐色	本葉下流跡群。かぶり径<14.0>。カマツ出上。
34	3区 5号住居	原始器	蓋	<15.7>	-	-	天舟部湾折込まれる。かぶりなし。内外面ロコ口成形によるヨコナデ。	白色粒子・チャート少量	○	良好	内外面：10YR6/1 暗灰色	本葉下流跡群。径5.5cm。
35	3区 5号住居	原始器	壺形	<14.8>	-	5.0	口縁部ヨコナデ。体部直線的。内面及び外面下部湾折ロコ口成形によるヨコナデ。体部上縁斜傾ヘラズリ。底状成。	白色粒子少量、チャート少量	○	良好	内外面：25Y6/1 灰白色	本葉下流跡群。
36	3区 5号住居	原始器	杯	-	<8.2>	(10)	胴部内面ロコ口成形によるヨコナデ。底部斜傾ヘラ切り後未調整。	白色粒子少量、チャート・砂粒少量	○	良好	内外面：25Y6/2 灰白色	底部文字不明層群。本葉下流跡群。
37	3区 5号住居	土師器	杯	<15.9>	-	<3.1>	口縁部直線的に立上がる。内外面ヨコナデ。体部僅かに内湾。中位で僅かに外反をもち角状を呈する。内面ヨコナデ。外面ヘラズリ状突起。	白色粒子・チャート・砂粒少量	○	良好	内外面：5YR6/8 褐色	内面ミダシ付。葛尾Ⅱ式マツ出上。

38	3区 5号住居	土師器	川	<169>	-	(18)	口縁部や外反し内外面コナテ。体部縦やかに立上り外周ヘラズリ内面コナテ後ヘラミダシ	白色粒子少量、 チャート・砂 礫少量	-	良好	内外面：10YR8/6 黄褐色	外面赤影。
39	3区 5号住居	土師器	小型壺	122	6.5	24.3	口縁部内外面コナテ。胴部内面ヘラテ。上へ中位斜方向ヘラズリ。胴部下位斜方向ヘラズリ。	白色粒子・砂 礫少量	-	良好	内外面：5Y5/4 にぶい青褐色	胴部下位斜方向の章孔。床面・コナテ出土。
40	3区 表土一拵	磁器器	杯	<126>	<59>	47	口縁部外反。体部僅かに内湾。ロケロ成形によるコナテ。底部回転ヘラ切り後未調整。	白色粒子少量、 チャート・砂 礫少量	-	良好	内外面：N5/ 灰色	本室下階跡群。
41	3区 表土一拵	土師器	小型壺	<149>	-	(75)	口縁部上方につままれる。口縁部コナテ。胴部「」字状。胴部内面ヘラテ。外面ヘラズリ。	白色粒子少量、 チャート少量、 砂礫少量	-	良好	内外面：7.5YR8/8 褐色	室籠型壺。
42	3区 表土一拵	灰輪陶器	碗	<159>	-	(34)	内外面欠輪。	白色粒子微量	-	良好	断面：5Y7/4 灰白色 輪：7.5Y3/3 灰オリーブ色	
43	3区 表土一拵	土師器	杯	-	-	-	口縁部コナテ。体部直線的にたちあがる。外面ロケロ成形によるコナテ。内面ミダシ。	白色粒子少量、 茶色粒子・砂 礫少量	-	良好	外面：10YR7/4 にぶい青褐色 内面：2.5Y2/1 黒色	内裏。体部内面文字 種不明書群。
44	4区 24号土坑	縄文土器	胴部	-	-	-	腹い熱赤文。	白色粒子・石 炭少量、 砂礫少量	-	良好	内外面：7.5YR7/6 褐色	早期書群・幅取台式土器。
45	4区 25号土坑	縄文土器	胴部	-	-	-	角押文。	白色粒子少量、 炭母粒微量、 チャート・砂 礫少量	-	良好	外面：7.5YR5/3 にぶい褐色 内面：5YR5/6 明茶褐色	中前期書群・阿玉台1 b式土器
46	4区 包含層一拵	縄文土器	口縁部	-	-	-	熱赤文。口縁直下に無文帯。	白色粒子・ チャート少量、 石英・炭母粒 微量	-	良好	内外面：10YR5/4 にぶい青褐色	早期書群・幅取台式土器。
48	5区北 3溝	縄文土器	口縁部	-	-	-	2条の沈線による横位の区画内を斜行沈線と斜交文で光麗。	白色粒子・ チャート・砂 礫少量、 炭母粒微量	-	良好	内外面：2.5Y4/2 暗灰青色	中期書群・田口下層 式土器。
51	5区北 3溝	弥生式土器	口縁部	-	-	-	腹形土器。増加条2條施文。	炭母粒微量	-	良好	外面：10YR4/2 灰黄褐色 内面：10YR6/4 にぶい黄褐色	晚期・十王台式土器。
52	5区北 3溝	弥生式土器	胴部	-	-	-	腹形土器。増加条2條増加1条施文。	炭母粒少量、 砂礫少量	-	不真	外面：10YR8/6 黄褐色	晚期・十王台式土器。
53	5区北 3溝	弥生式土器	胴部	-	-	-	腹形土器。増加条2條施文。	炭母粒・砂粒 微量	-	良好	内外面：10YR7/6 明茶褐色	晚期・十王台式土器。
54	5区北 3溝	弥生式土器	底部	-	-	-	腹形土器。増加条2條施文。底部赤目形。	砂礫少量	-	良好	外面：10YR4/2 灰黄褐色 内面：10YR7/6 明茶褐色	晚期・十王台式土器。
55	5区北 表土一拵	縄文土器	胴部	-	-	-	L系縄文とR系縄文による点状の構成。内面赤赤文。	礫少量、白 色粒子微量	-	良好	外面：5YR5/6 明茶褐色 内面：10YR5/4 にぶい青褐色	早期書群・条状文系 土器。
59	5区北 表土一拵	弥生式土器	胴部	-	-	-	腹形土器。多条横目文による風筒文。以下調文施文。	炭母粒・砂粒 微量	-	良好	外面：7.5YR3/1 黄褐色 内面：10YR7/6 明茶褐色	晚期・十王台式土器。
60	5区北 表土一拵	弥生式土器	底部	-	-	-	腹形土器。増加条2條による網目状の構成。	白色粒子・砂 礫少量、 炭母粒微量	-	不真	外面：10YR4/2 灰黄褐色 内面：10YR7/6 明茶褐色	晚期・十王台式土器。
61	5区北 表土一拵	磁器器	高台付 盤	<229>	-	(31)	体部中位で大きく内反し立上る。内外面ロケロ成形によるコナテ。底部知り難し。施法不明。高台付断面不明。	白色粒子微量	-	良好	内外面：2.5Y6/3 にぶい黄褐色	
63	5区中央 27号土坑	縄文土器	口縁部	-	-	-	腹い熱赤文。	白色粒子少量、 石英・チャート 少量、 砂礫少量	-	不真	内外面：10YR5/4 にぶい青褐色	早期書群・幅取台式土器。
64	5区中央 27号土坑	縄文土器	胴部	-	-	-	無文。横位のナゲ整形。	白色粒子・石 炭・チャート 少量	-	良好	内外面：7.5YR6/6 褐色	早期書群・天丸輪式土器。
65	5区南 6号住居	磁器器	蓋	<164>	-	-	天部表面滑玉まれる。ふちりなし。内外面ロケロ成形によるコナテ。	白色粒子・砂 礫少量、 チャート 少量	○	良好	内外面：10YR6/1 靑灰色	本室下階跡群南・西 込小戸<160>。美 ね焼土による焼きム ク。
66	5区南 6号住居	磁器器	杯	<139>	-	(35)	口縁部僅かに内反しコナテ。体部直線的に立上る。内外面ロケロ成形によるコナテ。	白色粒子少量、 チャート・砂 礫少量	○	良好	内外面：N/4 灰色	本室下階跡群。
67	5区南 7号住居	磁器器	杯	-	<77>	(26)	字体直線的に立上る。ロケロ成形によるコナテ。下部回転ヘラ切り後未調整。	白色粒子・ チャート少量	○	良好	内外面：5Y6/1 灰色	本室下階跡群。
68	5区南 7号住居	磁器器	高台付 杯	-	<82>	(15)	体部内外面ロケロ成形によるコナテ。底部回転ヘラ切り後ヘラテ。高台付断面「」字状。	白・灰色粒子少量、 砂礫微量	○	良好	内外面：N/6 灰色	底部書群「上」本室 下階跡群

第4表 出土平瓦属性一覧

図録 番号	出土地点 遺構	全長 (残存長) (cm)	長さ (残存長) (cm)	重量 (g)	凹面曲線	凸面曲線	胎土 属性	海綿 合計	焼成	色調	備考
47	4区 表土一拵	(97)	20	1414	6月	長縄明3	白色粒子少量、チャート多量	-	普通	10Y8.5/6 黄棕色	側面取り2回

第5表 出土石器・金属製品属性一覧

図録 番号	出土地点 遺構	種別	器種	長さ (残存長) (cm)	幅 (残存幅) (cm)	高さ (残存高) (cm)	重量 (g)	特徴・手法	備考
3	1区 2号住居	石器	R・F	64	3.3	1.3	205	平頭磨打面の素材。背面左側縁と腹面末端に二次加工痕。	チャート
4	1区 2号住居	石器	R・F	(23)	1.7	0.8	24	末端欠損。左側縁の表裏に二次加工痕。	チャート
5	1区 2号住居	石器	宍石	132	5.6	5.2	5573	水化。磨痕全面。側縁に磨打痕。	砂岩
6	1区 2号住居	石器	硯石	7.4	5.1	2.7	792	縦断面以外磨痕。特に左側顕著。	砂岩
13	1区 2号住居	鉄製品	鏝	(90)	0.2	-	287	右手用。	-
15	1区 6号土坑	石器	硯石	6.7	2.0	1.5	358	両端面。河溝欠損。	安山岩
21	1区 表土一拵	石器	楔形石器	26	1.7	0.8	29	両片素材。両端に溝孔。背面左は折断面。	チャート
22	1区 表土一拵	石器	R・F	(70)	7.1	2.7	1017	腹面の両側縁に連続した二次加工痕。	ホルンフェルス
23	1区 表土一拵	石器	R・F	2.3	3.4	1.2	56	腹面主体に二次加工痕。	チャート
24	1区 表土一拵	石器	打製石 斧	(73)	5.7	2.6	1165	分銅形石斧。中位で欠損。	ホルンフェルス
25	1区 表土一拵	石器	打製石 斧	(48)	(49)	2.1	603	基部のみ残存。表面丁寧な成形。裏面は自然面を大きく残す。	ホルンフェルス
32	3区 5号住居	石器	宍石	82	14.5	3.6	4564	上面磨製痕。半分欠損。	ホルンフェルス
49	5区 3号溝	石器	石杖	24	4.4	3.0	314	自然面を打面とした最終剥離面。	チャート
50	5区 3号溝	石器	磨石	10.3	7.8	7.3	8117	全面に顕著な磨製痕。	砂岩
56	5区 表土一拵	石器	楔形石 器	40	29	1.5	107	折断面あり。一端に小溝磨痕。もう一端に折れ。	チャート
57	5区 表土一拵	石器	楔形石 器	22	3.2	1.4	57	磨打面の縦長両片素材。短い両側縁に微細磨製痕を伴う溝孔。	チャート
58	5区 表土一拵	石器	石杖	5.2	10.5	49	2902	両側作業面は之面。片面は磨打面からの剥離主体。反対面は両側磨を打面とした反対方向の両片剥離主体。面同士の切り合いは鋭角。	ホルンフェルス
62	5区 表土一拵	銅製品	キセル	(34)	1.0	0.5	22	-	焼口

第7表 瓦計量表

出土地点	1号墓石			1区墓土一區			3区墓土一區			1区塚區一區			4区塚土一區			統計					
	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数				
出土遺物	1	1	865													1	1	865			
	1	1	78.6	2	2	1,309										3	3	2,063			
				2	2	101.1				1	1	25.9				1	1	141.4			
小計	2	2	165.1	4	4	2,320				1	1	25.9	1	1	141.4	8	8	5,044			
遺品瓦・磁石瓦																					
	1	1	72.3															72.3			
小計	1	1	72.3										1	1	46.7	2	2	119.0			
不明・品目調査が不明のもの																					
小計																		26.6			
総計	3	3	237.4	4	4	2,320	1	1	26.6	1	1	25.9	1	1	46.7	1	1	141.4	11	11	7,120

第4章 総括

今回の調査では、縄文時代から中・近世に至る遺構・遺物が確認された。特に調査区の面積に比べると、確認された遺構は竪穴住居跡6軒、溝2条、土坑16基、ピット58基と多数にのぼる。以下、本項では、時代ごとに遺構・遺物のあり方からみた本地点を舞台にした土地利用の変遷を概観する。

なお、ピットについては縄文時代から中・近世に至るものが混在していた可能性が高い。

1. 縄文時代

当該期の遺構としては12・13・16・24・25・27・29号の7基の土坑があげられる。このうち、12・13・16号土坑は1区、24・25号土坑は4区、27・29号土坑は5区から検出されたものであり、調査地点の広い範囲に分布していることが知られる。しかし、縄文土器を伴うものは12号土坑（早期後葉・条痕文系土器）・24号土坑（早期前葉・燃糸文系土器）・25号土坑（早期後葉・条痕文系土器）・27号土坑（早期前葉・燃糸文系土器）の4基のみであり、残る3基は掘り込み面や覆土のあり方などから縄文時代の所産であった可能性が想定されたものである。

本地点から出土した縄文土器は212点を数える。1区から出土したものが多く、他時期の遺構内より流れ込みの状態を確認されたものが大部分であり、同時期の遺構に明確に伴うものは先の4基の土坑と少ない。いずれも小破片であり、磨耗のため時期の不明なものも多いが、型式の明らかなものには早期前葉・稲荷台式土器・天矢場式土器、中葉・田戸下層式土器、後葉・条痕文系土器、中期前葉・阿玉台I b・II式土器、後葉・加曽利E I・III式土器、晩期中葉・大洞C I式土器などが含まれる。早期および中期土器を主体としており、晩期土器はわずかに1点が確認されただけである。

当該期の石器としては打製石斧3点、台石1点、磨石4点、楔形石器4点、R・F4点、剥片21点、石核3点などがある。分銅形石斧などの定形的なものを除くと、時期の特定できる資料は少ない。

なお、7基の土坑のうち、12号土坑は袋状という特徴的な断面形を示していた。本地点の南東50mほどの第6地点では、中期を中心とする多数の袋状土坑やフラスコ状土坑が竪穴住居跡とともに検出されている。12号土坑から出土した早期後葉・条痕文系土器とは時期を異にするが、本地点では中期土器も少なからず出土したことを考慮すると、本地点もこうした集落遺跡の一部を構成していた可能性が高い。

2. 弥生時代

十王台式を主体とする弥生後期土器の破片51点が出土している。この時期に伴う遺構の分布は不明であるが、近隣の掘遺跡では弥生後期の竪穴住居跡が1軒検出されている。

3. 古墳時代

当該期の遺構としては1区5号土坑があげられる。この他、3区5号住居跡からは3期（7世紀後半～8世紀前半）に比定される遺物が出土しており、本報告書では暫定的に古墳時代末～奈良時代初頭という時間的位置を与えておくが、いずれにしても遺構の分布はきわめて限定的である。1期（5世紀頃）と2期（6世紀前半）は出土遺物も少ないが、前者に属する土師器片が1区5号ピット内で確認されている。

4. 奈良時代

前出の5号住居跡以外に、5期（8世紀後半）に比定される1区2号住居跡が検出されている。また、奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられるものとして1区1号住居跡があげられる。古墳時代に比べると遺構数はやや増加しているようにも見えるが、続く平安時代に比べると限定的であることは否めない。全体の規模は不明であるが、2号住居跡は南北の径570cmを測り、この時期の住居跡としてはかなり大型の部類に属している。しかも、本住居跡からは新治窯跡群産の須恵器蓋が出土しており、他の住居と比べて特別な位置を占めていた可能性も考えられる。

土師器や須恵器の出土量は次の6期に次いで多く、特に前者のあり方が目立つ。4期（8世紀中頃）に比定される遺構は未検出であり、遺物の出土量も少ない。

5. 平安時代

前出の1号住居跡以外に、3区4号・5区6号・同7号の3軒の住居跡の分布が確認されている。4・6号は6期（9世紀中葉）、7号は5～6期（9世紀前半～中葉）に比定される。また、正確な時期の特定が難しく、古代として一括した1号と3号の2条の溝、18・22・23・28号の4基の土坑も、その多くが当該期に属していた可能性が強い。本地点の広い範囲にわたって分布しており、当該期の集落の広がりや構造が注目される。8世紀後半から9世紀にかけての時期は、本地点の西側にあたる台湾里庵寺跡観音山地区や南方地区で那賀郡衛周辺寺院の造営が相次いで行われ、その建設・維持・管理にあたった集団の増大や居住地域の拡大といった事情が想定されることなどを考えると、そうした動きとの関連についても相応の考慮が払われるべきであると考えられる。

調査区が狭かったこともあり、2条の溝の性格については明らかではない。7期（10世紀前半）に比定される遺構は未検出であり、遺物の出土量も少ない。

6期に属する遺物も今回の調査でもっとも多く出土している。墨書土器や寛書き土器が見られるのもこの時期であるが、文字を判読ができたものは底部に「十」の字が墨書された7号住居跡出土の須恵器高台付坏と、同じく底部に「十」の寛書きが施された2号住居跡出土の土師器坏の2例に限られる。また、流れ込みと思われるが2号住居跡から灰軸陶器も出土している。

なお、本地点からは平瓦や鬘斗瓦などの古代瓦が出土している。いずれも量は限られており、細片のため正確な時期の不明な例がほとんどであるが、前述した那賀郡衛や寺院との関連が注目される資料である。胎土にチャートや海綿骨針などを含む木葉下窯群産例が中心であるが、凹凸両面に糸切り痕を残す鬘斗瓦はひたちなか市原の寺瓦窯出土資料と共通する特徴をもつ。遺構に伴うものはない。

6. 中・近世

中世の所産と考えられる遺構としては古瀬戸系の灰軸鉦皿を出土した6号土坑、また中世～近世の所産と考えられる遺構としては1号土坑・17号土坑・20号土坑などがあげられる。遺構の数は限られるが、いずれも1区に集中分布していることが注意される。本地点のすぐ北側には当地地の北縁にあった長者山城城主・春秋氏の菩提寺と考えられる勝徳寺が所在していることから、その関連施設であった可能性も考えられるが、推測の域を出るものではない。

中・近世に属する遺物としては陶磁器、瓦質土器などが出土している。いずれも量は少なく、細片のため正確な時期の不明な例がほとんどである。

(林)

引用・参考文献

- 井上義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 井上義安・栗原芳子 1996 『水戸市台渡里廃寺跡 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里遺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 茨城県 1995 『茨城県史 考古資料編 奈良・平安時代』
- 茨城大学考古学研究会 1976 『茨城大学周辺遺跡分布調査報告書Ⅱ』
- 小川和博・大沼淳志・川口武彦 2006 『台渡里遺跡 - 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- 川口武彦 2006 『範囲確認調査の成果』『国指定記念シンポジウム 台渡里廃寺跡を考える 資料集』水戸市教育委員会・茨城県教育委員会
- 川口武彦 2007 『発掘された常陸国最古の初期寺院 - 国指定史跡台渡里廃寺跡 - 』『常総の歴史』35号 歯書房
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2005 『台渡里廃寺跡 - 範囲確認調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- 瓦吹 堅 1988 『常陸の古印』『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会
- 瓦吹 堅 1991 『水戸市台渡里廃寺発掘Ⅲ - 観音堂山・南方・長者山地区の性格について - 』『婆良岐考古』13 婆良岐考古同人会
- 黒澤彰哉 1998 『常陸国那賀郡における寺と官衙について』『茨城県立歴史館報』25 茨城県立歴史館
- 黒澤彰哉 2000 『台渡里廃寺と那賀郡衙』『文字瓦と考古学』国土館大学実行委員会
- 小林信一 2006 『Ⅲ 下総地域の官衙関連遺物について』『研究紀要』25 財団法人千葉県教育振興財団
- 佐々木藤雄・川口武彦・大橋 生 2006 『台渡里廃寺跡 - 市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2) - 』水戸市教育委員会
- ・林 邦雄・深美賢吾 2008 『台渡里遺跡 (第39次調査) - 公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦 2004 『台渡里廃寺跡 - 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- ・関口慶久 2004 『台渡里廃寺跡 - 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- ・藤沼香未由・川口武彦・小松崎博一編 2004 『台渡里廃寺跡 - 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- 外山泰久 1993 『アラヤ前遺構 (水戸市渡里町) をめぐって』『常総の歴史』13 歯書房
- 土生朗治・川口武彦・新垣清貴 2005 『台渡里廃寺跡 - 市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』水戸市教育委員会
- 水戸市史編纂委員会 1963 『水戸市史』上巻 水戸市



調査区全景



作業風景



1区全景（南より）



1区1号住居跡（北より）



1区2号住居跡遺物出土状況（南より）

図版2



1区2号住居跡 (北より)



1区6号土坑 (西より)



1区12号土坑 (西より)



1区ビット群 (南より)



2区全景 (北より)



3区全景 (北より)



3区4・5号住居跡 (南より)



3区5号住居跡 (南より)



4区全景（北より）



5区南側全景（南より）



5区南側6・7号住居跡（北より）



5区中央部全景（北より）



5区北側全景（北より）



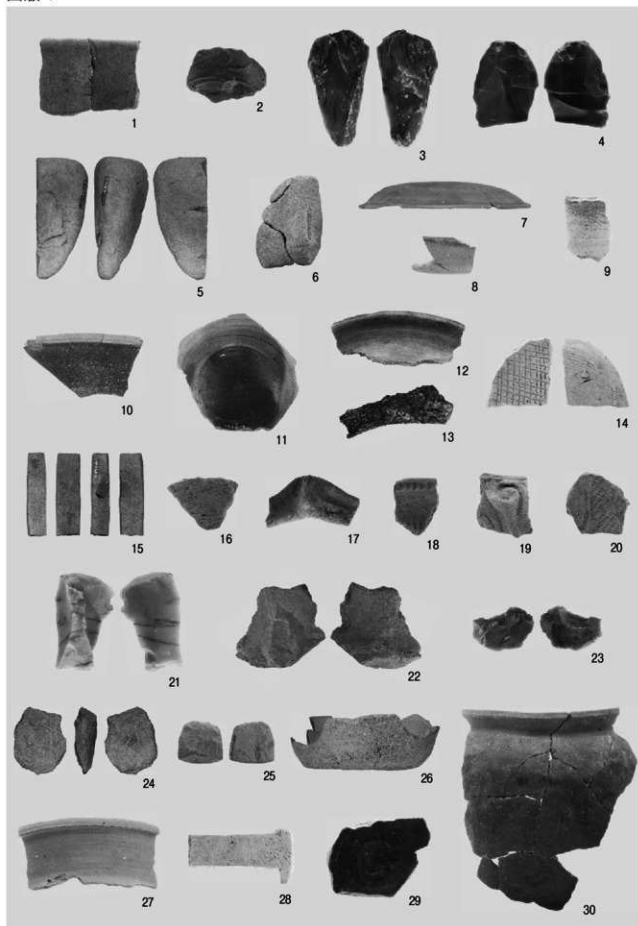
5区北側3号溝遺物出土状況（北より）



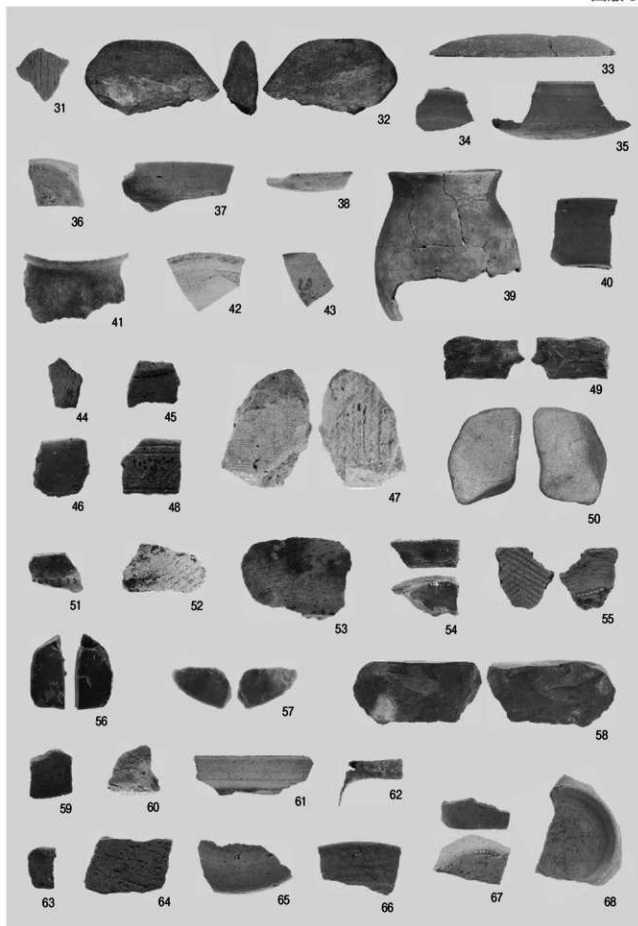
5区北側基本土層断面（北より）



作業風景



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	わたりちよういせき(だいごちてん)							
書名	波里町遺跡(第5地点)							
副書名	市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第16集							
編集者名	佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦・瀧美賢吾・関口慶久							
著者名	佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦・瀧美賢吾・関口慶久							
編集機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111							
発行年月日	2008(平成20)年6月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
波里町遺跡	水戸市波里町字八幡前2594地先～2801地先(市道常磐31号線)	08201	121	36°24'13"	140°26'31"	2008.3.24 ～ 2008.5.23	128.9 m ²	市道常磐31号線道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
波里町遺跡	集落跡	縄文	土坑7、ピット	土器、石器		縄文時代の7基の土坑は早期前葉・撚糸文系土器および後葉・条痕文系土器の時期を中心とする。弥生時代の遺構はみられないが、出土した土器は後期・十王台式を主体とする。古墳時代とした3区5号住居跡は古墳時代末～奈良時代初期の土器を伴うものであり、正確な時間的位置に問題を残す。奈良・平安時代の住居跡としては1区1・2号、3区4号、5区6・7号の5軒があげられる。構成的には9世紀代に位置する例が多い。本地点の主体を占める時期であり、古代として一括した1号と3号の2条の溝、18・22・23・28号の4基の土坑も、その多くが当該期に属していた可能性が強い。本地点西側の台渡里庵寺跡観音山地区や南方地区では那賀郡衙や寺院の造営が相次いで行われていることから、その建設・維持・管理にあたった集団の居住地との関係が注目されるが、両者の結びつきをうかがわせるような資料は確認されていない。中・近世の遺構としては、古瀬戸系の灰釉鉋皿を出土した6号を含めて4基の土坑が検出されている。本地点すぐ北側に位置する、長者山城城主・春林氏の菩提寺である勝徳寺に関連する施設であった可能性も考えられるが、推測の域を出ない。		
		弥生	なし	土器				
		古墳	竪穴住居跡1、土坑1、ピット	須恵器、土師器				
		奈良・平安	竪穴住居跡5、溝2、土坑4、ピット	須恵器、土師器、墨書土器、ヘラ書き土器、瓦、砥石				
	中世・近世	土坑4、ピット	陶磁器、瓦質土器、砥石					

※北緯・東経は測地系 2000 対応。Web 版 TKY2JD (Ver.1.3.79) による変換。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。 例) ミ121-5 SD1のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能ないように作成している。合計1冊(綴り)
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお、未使用分については種別毎に分類、収納してある。

水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡 —範囲確認調査報告書—	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡 —市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡 —グランディヒルス元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡 —市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡 —集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005年3月発行
第6集	吉田古墳Ⅰ —史跡整備計画に伴う吉田古墳群第3次調査報告書—	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点) —市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006年3月発行
第8集	環遺跡(第3地点) —ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第9集	環遺跡(第4地点) —プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第10集	吉田古墳Ⅱ —史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書—	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点) —市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点) —住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第14集	大串遺跡(第7地点) —介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第15集	台渡里遺跡(第39次調査) —公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第16集	渡里町遺跡(第5地点) —市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告第16集

渡里町遺跡

(第5地点)

—市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成20年6月30日

発行 平成20年6月30日

編集 株式会社東京航業研究所
発行 水戸市教育委員会
印刷 関東図書株式会社
〒336-0021
埼玉県さいたま市南区別所3-1-10
TEL 048-862-2901